

第 3 国研修事前調査のための 7 ヶ国出張報告

SMASSE の経験・成果をアフリカへ！

杉山 隆彦 (チーフアドバイザー)

9 月後半から 10 月中旬にかけ、プロジェクトでは、来年 1 月に予定している第 3 国研修の事前調査のために、ザンビア、南アフリカ、レソト、ジンバブエ、モザンビーク、ナミビアおよびルワンダに調査団を派遣しました。一行はケニアの教育省教育局長が前半の団長、主席視学官が後半の団長として、訪問国の教育省関係者と研修ニーズやコスト・シェアリングに関して協議しました。

この研修計画は、プロジェクトの第 1 フェーズで蓄積した域内連携活動の成果が認められ、第 2 フェーズでは正式にプロジェクトの活動として協力のデザインマトリックスに組み込まれたことにより、中等理数科教育の強化活動をケニア国内のみならずアフリカ域内にも拡大するという活動の一環です。これまでに 4 回、域内連携強化のための会議を開催し、まず、課題とその解決に向けアフリカ諸国が連携し、アフリカ人によるアフリカの問題解決の場を作る必要があるということから、東西南および中部アフリカ理数科教育強化連絡協議会 (SMASSE WECSA Association) という組織を作り、ナイロビに事務局を置きました。

そして、アフリカ諸国の理数科教育の現状は、量的に問題がある国、量・質に課題のある国等の共通認識を得てきました。また、理数科教育の不振の原因が資機材の不足によることも確かですが、理数科教育に対する生徒や教員の姿勢に問題があり、その是正には教授法の改造が求められているということも関係者で共有することになりました。その結果、理数科教員の資質の向上が、理数科教育強化の緊急の課題であるという共通認識も得られました。このような背景を踏まえ、中等理数科教員養成に係わる人々や実際教育現場に携わる理数科教員を対象とした研修計画が浮上したといえます。

ザンビアでは、このような状況を教員自身が危機感として捉え、教育省の支援を得つつ教員自身が強化研究組織をつくり、理数科教育の強化活動をしております。プロジェクトでは、この組織と連携して昨年、ルサカで共同ワークショップを開催しました。今回、ザンビアを訪問した際には、この組織と SMASSE WECSA 間で、今後本研修を通しザンビアにおける理数科教育の更なる向上に努力しようという合意をしてきました。

ザンビアでケニアチームの団長である教育局長の関心を引いたのは、我が国のシニア海外ボランティアの理数科教材開発活動でした。特に共同ワークショップ時にケニアチームの紹介した事例が教材として形になっていたことでした。

ナミビアでは、多くのケニア人が教育界に雇用されている姿を見ることが出来ました。独立後の人材不足を国の財力による外国人雇用で凌ぐのは止むを得ないことですが、早急に自国の人材の養成の必要性が認められました。我々は、そのため、教員能力向上をケニアへの少数の教員派遣より、現地で教員研修を開催し、その際にケニアから人材を派遣し相互協力をしようということに合意してきました。ナミビアは、鉱物資源に恵まれた人口 200 万弱で人間より家畜の数の方が多いい国です。施策により自国の人材養成の促進は可能な国です。資源を食いつぶすのではなく、人造りに資源が活用されることが期待されます。

レソトでは、初めてアフリカの王国の姿を見る機会を得、民主化されたとはいえ、まだ古いアフリカの伝統的村社会の存在を垣間見ることが出来ました。これまで、アフリカの独立国の発展障壁は、多民族・多言語が大きく影響していると考えてきましたが、単一民族・単一言語のレソトも他のアフリカ諸国と同様に開発問題では多くの課題を抱えているという現実を見て、アフリカの開発課題の複雑性を再認識しました。

南アフリカに周囲を取り囲まれ、経済的に南アフリカに依存する特異な国です。しかし、そこでも理数科教育の強化には教員研修制度を造り、関係者が努力している様子でした。レソトでは、研修制度の責任母体である教育省視学官局とケニアでの研修を活用し、既存のレソトの研修をさらに活性化することを合意してきました。

モザンビークは元ポルトガルの植民地です。従って、公用語はポルトガル語で、我々は意思疎通に難しさを感じました。しかし、英語教育も初等教育に取り入れられており将来はコミュニケーションの問題はかなり解消されると予想されます。また、この国は、広大な面積と大きな人口を有していることもあり、教育分野のみならず社会開発全体、ひいては国全体の開発が遅れているようです。特に社会開発分野の後進性は、植民地時代の宗主国の植民地政策と大きく関係しているようです。

ケニア人は、モザンビークの社会インフラの後進性を見て、ケニアが英国の植民地であったことを感謝していました。従って、この国では、教育サービスが末端まで十分届いていないという絶対的量的不足という課題を抱えておりますが、教育開発は質と量の調和を必要とし、低迷する理数科教育の強化に本研修を活用したいという要望は強く、我々もケニアのハランベ精神と一緒にやりましょうということで帰国しました。

ジンバブエでは、政治的理由による社会・経済の混乱を実体験してきました。政府が、可耕地の約 8 割を白人に所有されていた土地をアフリカ人に取り戻すために強制的に土地を取り上げてきたことはご承知のことと思います。その結果、国内経済は大混乱に陥っております。政府の政策を否とする外国の圧力と収用した土地配分に係わる不正等内外の諸要因により経済は麻痺状態です。タンザニアのニエレレ政権の末期も経済はどん底に陥りましたが、政権交代後徐々に回復して来ましたが例を思い起こしますと、ジンバブエの現政府は末期に近づいておりますので、そんなに遠くない将来、現状は改善されると期待しつつ帰国しました。そのようなジンバブエですが、教育関係者は、以前の高い教育水準を取り戻すべく努力しておりました。幾多の困難にもかかわらず教育改善に挑戦する姿は尊敬に値するもので、我々も彼らに対する支援を約束してきました。過去に、グレートジンバブエを築いたこの国の現状を見、ケニア人ともどもアフリカ諸国で起こった数々の失政を論議してきました。

南アフリカは巨大な国で、我が国はムプマランガ州で理数科教育強化支援をしております。昨年 8 月にヨハネスブルグで開催された WSSD 会議では、教育分野でのわが国の対アフリカ支援として、ケニア、ガーナおよびこの南アフリカで実施されるわが国の教育プロジェクトを拠点とするネットワークをベースとする教育支援策が掲げられました。SMASSE WECSA はこの路線に乗っており、これまでの連携会議も 2003 年度の第 3 回会議はガーナで実施

しました。従って、協議の主題は、第 4 回会議を来年ムプマランが州で開催する可能性を検討するということでしたが、ムプマランガの関係者の賛意を得ることが出来ました。

最後のルワンダですが、まだ記憶に生々しい大虐殺のあった国とは思えないほど平和と安定を取り戻していました。今は、過去を忘れ、ルワンダ人によるルワンダ建設に向けた国民の連帯意識の醸成に努力が傾けられているようです。戦後の復興ということで、多くのドナーが入り乱れて援助を行っているという印象を受けましたが、ルワンダ人自身も自助努力を怠らず、教員研修も自力で行っているという報告を受けました。国内に 10 ヶ所の研修センターを設け、定期的に研修を行っているということで、我々との連携のお膳立ては既に出来上がっているという状況でした。従って、ルワンダからの研修への参加と現地での研修に対する支援という両面から連携が出来るということになります。この国は、元来フランス語が公用語でしたが、現在は教育では英語教育も公認されています。従って、学校では、英・仏 2 本立ての授業が行われているという非効率性も見られます。しかし、当初危惧した言語問題は、キガリ市内では、スワヒリ語が非常によく通用し、我々フランス語が理解できない者にはスワヒリ語を媒介して意思疎通が出来たことは驚きで、モザンビークよりも言語問題では対処しやすいのではないかと安堵しました。ルワンダは狭い国土に約 800 万人の人口を抱える人口密度の高い国です。従って、連携協力の成果も出やすいのではないかと期待の大きい国です。また、教育大臣に面会するという機会に恵まれ、大臣からは是非第 5 回の SMASSE WECSA 会議はルワンダがホストを務めたいという申し出もありました。またルワンダでは、協議の場で再三 JICA の緒方理事長の名前が出され、困難時における UNHCR 時代からの理事長の支援に対する謝意が表されました。今後のわが国の協力に大きな期待を寄せているという印象を受け帰国しました。

最後に、第 3 国研修に対するコスト・シェアリングはいずれの国も参加者の日当を負担するということになり、第 3 国の名の示すように、支援国の日本、主催国のケニアと参加国の 3 者が経費を分担するという形になり、それぞれの国が本研修に対するオーナーシップの意識を持つことになると期待できるようになりました。また、今回の歴訪の成果の一つは、同行したケニア人の目が広がったことにあります。特にルワンダやモザンビークに見られる言語の問題、また、旧宗主国の違いによる行政機構の差異、財力はあるが人的資源不足に悩む国、等々初めて見るアフリカの多様な社会に驚くと同時に、アフリカの抱える課題の大きさに気づいたことです。従って、彼らが、アフリカの課題解決に向け地道に息長く努力を払う決意を新たにしてくれたのであれば、それは大きな成果であったと思います。さらに、今回の訪問国の理数科教育強化に対するニーズは高いという共通項は見つけれられたが、それぞれの国情には差異があります。理数科教育強化は、アフリカという共通項でくくれるところと国情を加味したきめ細かい対応という 2 面があり、前者はケニアを拠点とする SMASSE-WECSA の役割とし、後者はそれぞれの国からの研修参加者が研修成果を現地適応させる役割を担うことにより実現可能となるのでしょうか。このように前途は多難ですが、アフリカの理数科教育強化にアフリカ人が自発的に取り組もうという姿勢が見られるようになったことはそれを支援する我が国にとっても、心強いパートナーが形成されつつあるということの証であり、我が国からの息の長い地道な支援が必要とされる所以です。